
イス取りゲーム

石川楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イス取りゲーム

【Nコード】

N1773L

【作者名】

石川楓

【あらすじ】

高校3年の田岡章弘は突如不可解なゲームに巻き込まれる。『イス取りゲーム』と称されるそのゲームは、謎の施設内に無数にあるイスの中から、「当たり」のイスを探し出し座るというもの。もし座れなかったものには死が待っている。田岡章弘は、一緒にゲームに参加している仲間と共にゲームをクリアできるのか。

Game 1

Game 1

蒸し暑い。

もうじき夏が始まるうとしている頃はこの暑さだ。

夏が来るのが恐ろしい。

「クソ。暑すぎて勉強なんかできねえよ」

明日に控える中間考査のために、田岡章弘は机に向かっていた。が、もともと集中力に欠ける章弘に、さらにこの暑さが加わると、勉強などできるはずもなかった。

「あーも。やめだやめ！」

握っていた鉛筆を机にほつり投げ、大きく伸びる。するとそこに携帯の着信音が鳴った。

「誰だよ…こんな時間に…」

時刻は午前2時。

液晶画面を確認すると、【田中絵里】と表示されていた。

「もしもし？」

「あつ。章弘？私だよ。絵里。」

「ああ。で、何？こんな夜遅くに」

章弘が迷惑そうに聞くと、

「そろそろ章弘の集中力がなくなる頃かと思って」と能天気な声で答えた。

余計なお世話だ！

「それで、俺に電話したの？」

「うん。メールを送りに」

「そうか…。ありがと。でも俺もう寝るから」

章弘は大きくあくびをする。

「そっか。じゃあまた明日ね。ばいばい」

「じゃあ」

章弘はたまらず大きなため息をついた。

絵里とはつきあって5ヶ月になる。おせっかいだが、なかなかいいやつだ。

章弘はとぼとぼと歩き、電気を消す。そしてベットに入った。布団を羽織ったが、熱くてたまらず蹴り飛ばす。そして、何度か寝返りを打ち、眠りについた。

これから恐ろしいゲームに巻き込まれることも知らずに…。

Game 2

Game 2

「ああー、だりい」

章弘は3時限目の数学のテストが始まったやいなや、机に突っ伏した。

「おい。田岡、起きろ」

先生が章弘の頭を叩く。

「痛っ」

章弘は呟き、顔を上げる。さらに、小さく舌打ちをする。

「やりあいいでしょ」

そして章弘は見たこともないような数式を見つめて、顔をしかめる。

50分後、学校中にチャイムが鳴り響く。

「よっしゃあ！今日は終わり！」

章弘は叫び、友人の古賀樹のところへ向かう。

「樹、さっさと帰ろう」

古賀は一瞬迷惑そうな顔をし、

「まだ帰りの会があるだろ」

と言った。

それもそうだが…

「分かったよ。じゃ昇、一緒帰ろうぜ」

次は金岡昇のもとへ向かう。

「ごめん。俺今日呼び出し」

そう言つて昇は両手を合わせ、謝罪のポーズを取る。

「何だよ。じゃあ〜」

章弘が共に帰ろうとする友達を探していると、

「章弘、俺いいぜ」

と、姉崎祐輔が章弘に手を振った。

「おお。お前は心の友だよ」

「いやいや」

章弘は祐輔へ駆けていき、抱きしめる。

「きもいって」

すかさず祐輔は章弘を体から離す。

「よし。じゃ帰ろ」

そう言って章弘は鞆を担いで教室を出て行く。

「待ってって章弘お」

章弘と祐輔は帰り道、ゲームセンターに寄った。

「おい章弘、何か面白そうなのがあるぞ」

スロットで大量に勝って上機嫌な祐輔は、『MUSICAL
HAIRS』と書かれた扉を指差す。

このゲームセンターはいくつか部屋があり、それぞれ違うゲー
ム機がおいてある。その一室だ。

「ムシカルチャイルス？」

「ミュージカルチェアーズ」

何だ、こいつは。

人の間違いを平気で訂正しやがる。

「入ろうぜ、章弘」

「ああ」

章弘は祐輔に対して負け続けていて、もう手にコインは数枚しか
なかったが、いざとなれば祐輔に借りればいいと思い、入った。

部屋内は異常な静けさを帯びていた。

「何だよこの部屋：狭いし：誰もいねえじゃん」

「イスがたくさんあるな…」

18畳程のゲームがあるとは思えない狭いコンクリート固めの部
屋内には、25脚程度の鉄製のイスが円を描くように置いてあった。

「イス取りゲーム…?」

祐輔が呟く。

「おい祐輔、こんあ訳の分からない部屋さっさと出ようぜ」

章弘が部屋を出ようとすると、

「わあ!」

大きな音を立て、扉が閉められた。

先ほどまで聞こえていた騒がしい物音が、一瞬にして遮断された。

「なんだよ…」

章弘は驚き、もう一度扉に手を伸ばす。が、開かない。

「おい。どうなってるんだ!開けるよ!」

「どうした、章弘?」

章弘が扉を思いつき蹴り飛ばそうとすると、大きなノイズ音が部屋に響く。

「ぐわ!うつせ!何だこれ!」

章弘と祐輔は、同時に耳を塞ぐ。

数秒後、激しいノイズ音が止んだ。

「何だったんだ…?」

祐輔がおどおどしていると、ブツリと鈍い音がして、壁に2メートル四方程のスクリーンが光りだした。

「おい。こんなところにスクリーンとかあったか?」

章弘が尋ねる。

「さあ。あつたんじゃない?」

祐輔はあいまいに答える。

『はじめまして』

章弘と祐輔は、突然の事態に驚き、肩を跳ね上げる。

スクリーンに真っ白い仮面を被った人間 声から想像するに男だろうか、が映り、しゃべったからだ。仮面の中心には大きく「C」と書かれている。

『あなた方は、これより、「イス取りゲーム」を執り行ってもらいます』

「い、イス取りゲーム？」

章弘が聞き返す。

『ええ。そこには今23脚の椅子が用意されています。その内の一つに腰掛けてください』

仮面男は、淡々と説明を始めた。

「これも、ゲームなんじゃない？」

祐輔が章弘に尋ねる。

「そうかもな。俺らだけが特別参加できる裏ゲームだったりして章弘は苦笑した。

『それではこれより、イスに座ってください。なお、制限時間は5分です』

かまわず男は説明を続ける。

「とりあえず、座る？」

祐輔はそう言い、一番近くにあったイスに座ろうとする。

「そうだな…」

章弘も同じようにイスに座る。鉄の冷たさがお尻を通して伝わる。すると、

「いてっ」

と言い、祐輔が飛び跳ねた。

「どうした？」

「いや、勝手にコインが弾けて…」

祐輔が困惑した顔をして言った。

『そうです。この部屋にはイスが23脚ありますが、そのうち22脚が「外れ」です。「外れ」に座った方は、5コイン失います』
というと、俺は「当たり」に座り、祐輔が「外れ」に座ったということがある。

『なお、コインをすべて失った場合、罰を受けてもらいます』

「罰？」

『ええ。罰は、「死」です』

え？

章弘と祐輔は言葉を失った。

Game 3

Game 3

章弘君またさっさと帰っちゃったな

末次玲菜は頼杖をつき、帰りのHRを待っていた。

「玲菜」

どうしよう…。今日こそはって思ったのに…。

「玲菜」

追いかけてようかな。でも姉崎と一緒にだし…。

「玲菜！」

「は、はい！」

玲菜は思わず立ち上がる。

声が裏返ってしまった。はずかしい。

「何ボーっとしてんの？」

目の前には親友の神崎春が立っていた。

「もしかしてまた田岡？」

「うん…」

春は私が章弘君を好きなことを知っている。

「今日、告るって言ってなかった？もう行っちゃったよ？」

「うん、知ってる」

「追いかけてようよ」

「え？」

春の口からは思いもなかった言葉が出た。

「だから、一緒に追いかけてよ。祐輔は私がどーにかするから」

「え、いいの？」

「あつたりまえ！」

玲菜は顔を輝かせた。

「じゃ、行こー！」

「うん！」

春が友達でよかった。でも、断られたらどうしよう…。
そう考えると、また足がすくんだ。

「大丈夫かな？」

玲菜は不安そうに春に聞いた。

「きつとね」

春はかわいらしくウィンクしてみせた。

下足箱に向かう途中、担任とばったり会った。
そこで春が先生につかまった。が、春のおかげで私はここまで「
れた。

「ゲーセン行こうぜ」

姉崎の声だ。

いる。

すぐそこに。

玲菜は必死に荒い息を我慢する。

「いいぜ。そういえば最近できたあの店行こうぜ」

今度は章弘君の声。

急に鼓動が早くなる。

ここで行く？

いや、姉崎が邪魔だ。

せめて春がいれば…。

じゃあ尾行？

うん。それしかない。

玲菜は決意した。

そして章弘たちがちょうど下足箱を出て行ったあたりに、急いで
靴を履き替える。

「急がなきゃ」

そのまま玲菜は春が来るまで彰浩たちを尾行した。

「うっ、うっ」

章弘が大きな店の前で立ち止まり、指を刺す。

何てはでな店なんだ。昼間だというのに、ネオンが光り輝いている。

すると章弘たちはその店に入っていた。

ええ、どうしよう…。こんな店は入れないよ…。

玲菜は春にメールした。

件名：章弘君

本文：尾行していたら大きなゲームセンターに章弘君たちが入って行っちゃった。お願い！早く来て！

【送信完了】と液晶画面に表示されると、玲菜は意を決し、店に入った。

店内は思わず耳を塞ぎたくなるようなうるささだった。

玲菜は一瞬顔をしかめ、章弘を捜す。

章弘君どこ？

きよろきよろしていると、スロットで遊んでいる章弘を見つけた。だが何だか不機嫌そうな顔をしている。対する祐輔は、上機嫌だ。章弘君どうしたんだろ…。

「玲菜！」

いきなり肩を叩かれ、玲菜はひゃっという声とともに飛び跳ねた。

「春！」

そこには春が立っていた。

「田岡は？」

「あそこ」

玲菜は章弘のいるところを指差す。

「じゃ私が祐輔をどけるから、その時外に呼び出して、いきな！」

「う、うん…」

またもや緊張してきた。

心臓の音が小刻みに聞こえる。すると、

「あつ、動き出したよ」

春が囁いた。さっきまで章弘がいたところを見ると、いなくなっていた。

「追いかけてよ」

春は玲菜の手を取り、歩き出す。

すると、章弘たちは【MUSICAL CHARIS】と書かれた部屋に入っていた。

「私たちも行くよ」

春がかげだす。玲菜も続く。

そして春が扉を開けた。

「えっ？」

Game 4 (前書き)

不評、好評の言葉、どんどん送って下さい！
勉強やばげましになるので。

Game 4

Game 4

「死…?」

祐輔はつぶやく。

『ええそうです。死です。コインがなくなり次第、その方には死んでもらいます』

仮面の男は抑揚のない台詞を言い続ける。

「そういう設定なんだよ、祐輔」

章弘は固まっている祐輔に声をかける。

「だって俺ら普通にこのゲーセン来たしさ、死なんてありえないだろ…。それにほら、俺のコインあと6枚だから2回外れに座るとゲームオーバーだぜ?そんなのあるかよ」

章弘は必死に説得する。

「だ、だよな…?」

祐輔は苦笑し、こちらを見つめる。

『なお、ゲーム中のコインの貸し借りは無効です。発覚した場合、直ちに死んでもらいます』

男の口調は妙に威圧感があった。

『ゲームは全部で15回。但し、先ほど座ったイスにはもう二度と座れません』

15回…。1回の制限時間が5分だから、単純計算で75分…。

「おい、さつき章弘は当たりのイスに座った。もうそのイスには座れないんだろ?」

祐輔がなにやら男と抗議している。

『ええそうです』

「じゃあ、もうこの中に当たりはないじゃないか!」

祐輔は必死になって話している。

なるほど…。確かに祐輔の言うとおりだ。

「おい！仮面野郎！卑怯じゃねえか！」

章弘も加わる。

『いえ。当たりのイスは毎回シャッフルされます。即ち、毎回どれかのイスが当たりということですよ』

そういうことか。

「で、当たりと外れはどうやって見分けるんだ？」

祐輔はすかさず男に質問する。

『それは、自分たちで考えてください。ゲームが面白くないので何だと…？』

「そしたらもう運だけじゃねえかよ！」

章弘は憤る。

しかしそんなのおかまいなしに、男は話を進める。

『それではこれより、第二ゲームを開始いたします！』

「待ちやがれ！」

章弘が男に怒声を放つ前に、スクリーンの光が消えた。

「ふざけやがって…」

章弘はもともと機嫌が悪かったせい、イスのひとつを蹴り飛ばした。

「章弘、落ち着け」

祐輔が彰弘を宥める。

「落ち着いてられっか」

「あの仮面男、こう言っただろ？『当たりか外れを見分ける方法は自分で見つける』って。てことは、見分ける方法があるってことじゃないか？」

祐輔は冷静な口調で言ってきた。

さっきまでびびってたくせに。

「じゃどうやって捜すんだよ」

「それは分からない」

祐輔は顔を伏せた。

一体どうすればいいんだ？

「とりあえず、イスを一つ一つ見ていこう」

祐輔はそう言い、自分の近くにあったイスを丁寧に確認し始めた。章弘もイスを確認しようとするのと腰をかがめると、背中に衝撃が走った。

「祐輔、お前、今コイン何枚持ってる？」

恐る恐る聞くと、

「え？63だけ…。それがどうかしたか？顔色も悪いぞ？」

章弘の身体の中を何かがすり抜けた。そんな感じがした。

「これ、俺はあと一回外れると、リーチだろ？」

「ああ。残り1枚になるからな」

「祐輔は、12回外れるとリーチなんだよな？」

「5×12で、えーと…60か。うんそうなるな。で、どうしたんだ？」

「もし当たりと外れの見分け方を見つけたとしたとする。そして、二人のうち一人が確実に当たりを引いていったとする。でも、それが成功するのは14ゲーム目までだ。15ゲーム目、俺らのどっちかがコインがなくなる…」

祐輔の顔色が、みるみるうちに、悪くなっていく。俺も、あんな顔色なのだろうか？

「ってことは、最終ゲーム…どっちかが死ぬ…？」

冷や汗が、とどめなく溢れているのが分かった。

Game 5 (前書き)

すみませんおそくなりました
いきあたりばったりで書いているので、
どっかご承を。
感想お願いします。

Game 5

Game 5

目の前に広がったのは、学校の体育館ほどの広い部屋。ただ違うのは、壁、床、天井が全てコンクリートでできていて、窓は一つもない。一番奥には、大きなスクリーンが置いてある。

「玲菜、ここ何？」

春が不安そうな顔で玲菜に尋ねる。

「し、知らないよ」

玲菜も不安の表情を浮かべる。

「それより、田岡達は？」

春が部屋の奥に歩いて行く。すると、大きな音を立てて、扉がいきおいよく閉まった。

「きゃっ」

玲菜は思わず小さく悲鳴を上げた。

すると、部屋の一番奥にあったスクリーンが、突然光を放った。

『こんにちは』

スクリーンに映し出されたのは、体格からしておそらく20台半ばと思われる若い女性。顔には、中心に『D』とかかれた白い仮面をしている。

「だ、誰？」

春が恐る恐る聞いた。

『これより、あなた方には「イス取りゲーム」をやってもらいます』

春の質問を尻目に、女は言った。

「イス取りゲーム？」

玲菜は小さな声で聞き返す。

『はい。しかし、あなた方はイス取りゲームにおいて重要な、命

の源である「コイン」
を一枚も持っていない」

女ははきはきした声で、だが何だか重くのしかかるような気迫ある声で、何やら話し出す。

『よつて、第一試験はスルーとなります』

第一試験？一体何のことだ。

「何言つてんのよ、あんた。一体これは何？私達、ゲームしに来たわけじゃないんだけど」

春は怖気づかず、女に聞いた。

『だからこれは、イス取りゲームです。あなた方は、そのゲームに参加したとみなされました』

この部屋に入ることが参加するということなのか？

玲菜は頭を抱える。

「それより、ここにさつき2人の男が入ってきたと思うけど、彼らはどこへ？」

章弘君達のことだ。

春はやっぱり頼もしい。

『彼らは、Cルームへと移動しました。そして、第一試験を行っております』

女は淡々と答える。

「だから第一試験って何よ！」

春はとうとう怒鳴った。いらいらが募りに募ったのだ。

『あなた方には関係ありません。しかし、コインを持たないということは、それだけで死を意味します。なので、これよりコインを稼ぐポーンゲームをしてもらいます』

女はどんだん話をすすめていった。

『これより天井から大量のコインを投下します。拾った枚数のコインが持ち数となります。一枚も拾えなかった場合、ゲームオーバーとなり…死んでもらいます』

女の威圧感ある声は、玲菜の胸に重くのしかかった。

「死」…

どういうことなのだ…？

玲菜が考えているの察したのか、春は玲菜をやさしく説得した。

「なんだかよく分からないけど、とりあえずこのゲームに参加しちゃったみたい。でも、たかがゲームだし、さっさと終わらせて田岡達を探そう！」

玲菜の不安は一瞬にして消え去った。

玲菜は深く頷いた。

Game 6 (前書き)

1年くらい放置プレイしててすみませんでした……

話の感想お願いします！

Game 6

Game 6

何度電話しても出ない。

一体章弘はどこ行ったのかな？

田中絵里は自宅への帰路の途中何度も章弘に電話した。が、一度も繋がらなかった。

今日は放課後デートしたいって言ったのに……。またすっぱかしちゃって。

章弘はよく絵里とのデートをすっぱかす。すっぱかすというよりは、忘れている、といったほうが妥当かもしれない。この前の付き合って5ヶ月記念日のデートも忘れてて、結局友達とバッティングセンターで遊んでいたらしい。

本当に私に気があるのかな？

もしかしたら私のことどうでもいいんじゃないかな……。

そろそろ私たち、潮時なのかな。

絵里が落ち込んでいると、ものすごい勢いで誰かが横を走り去って行った。思わず肩がぶつかった。

「ごめんなさいっ」

その人はそう一言いって、また前を向いて走り出した。

確か、あの子は隣のクラスの神崎春さん……？

どうしたんだろっあんなに急いで。

また絵里が歩き出そうとすると、何かを踏みつけたような気がした。足元を見てみると、ものすごくキラキラした、携帯電話だった。開いて中を確認してみると、神崎春と末次玲菜が写ったプリクラが待ちうけだった。

これ、彼女のじゃ……。

そう思って絵里は神崎春が駆けていった方へ歩き出す。

一応届けなくちゃ。不便だろうし。

「もしもし友香？神崎春って人の家分かる？」

「あー春ちゃん？ごめんけど知らないなあ。絵里って春ちゃんと仲良かったっけ？」

「いや、別にそんなんじゃないけどさ……。分かった。ありがとうね」

そう言っただけで絵里は通話を切った。

届けようと思ったものの、彼女が急いで駆けていったため、見失った。そこで、彼女の家へ届けようと思ったのだが、その家の場所も分からない。仕方なく、友人に聞きまわっていた。

これで6人目。

「もしもし梓？神崎春って人の家、知ってる？」

絵里はもうほとんど諦めモードだった。

「春の家？うん。分かるよ」

「え？」

絵里の声が裏返った。

「本当？」

絵里がおそろおそろ尋ねると、

「うん。えつとね、」

と言っただけで説明してくれた。

「ありがとう！ほんと助かった！」

絵里はにこりとした。

でも道全然違ったなあ。また結構戻らなきゃ。

絵里は先ほど教えてもらった神崎春の家へと向かった

Game 7 (前書き)

初めて小説書くんでもだまだ乱文ですが、

感想よろしくお願いします。

Game 7

Game 7

「でも、ゲームってどうするの？投下されるコインを拾って…

…」

玲菜はまた不安になった。

『それだはこれよりボーナスゲームを開始いたします』

仮面の女がそう言うと、がこんと何かが開いたような音がした。

「な、何よ……」

春が警戒してあたりを見回したが、何の変化もない。
すると、

「いてっ」

頭に何かが当たった。それは金属音を鳴らし地面に落ちた。

「コイン……？」

「春、天井！」

春が天井を見上げるとちょうど春の頭上に位置する天井の部分が
ぱかりと開いていた。

「あそこから、コインが落ちてくるわけね」

春は分かったぞと呟き、天井の穴を見つめた。が、コインは落ち
てこない。

「ねえ、どーなってるの？コイン落ちてこないんだけど！」

春が叫んだ。

「これがコインかぁ」

玲菜は先ほど春の頭に当たって床に落ちたコインを拾い上げた。
その瞬間、

『ゲーム終了です』

女が冷たい声でそう言った。

「え？」

2人は声をそろえて言った。

「まだ一枚しかコイン落ちてきてないんですけどっ」
春が不満そうに女に問うた。

『ええ。そうですね。このボーナスゲーム、投下されるコインは一枚のみとさせていただきます。命は、そうたやすく手に入れられるものではありませんよ』

「意味わかんない」

春は苦笑した。

『では、先ほど申しましたとおり、コインは命の源です。その命がないとすれば、死ぬしかありません。ということ、今現在コインをお持ちでない神崎春さんには、死んでもらいます』

「は？何言ってるの？死ぬ？コイン？大体私達ゲームなんか参加した覚えないけど」

春が女に講義すると、

「春、おかしいよ……」

と玲菜がか細い声で言った。

「うん！絶対おかしいよね、こんなの」

と春は腕を組んだ。

「いや、そうじゃなくって、何で、あの人春の名前知ってるの？」

「え？」

そうだ、確かに私はここに来て一度も名乗っていない。しかしさつきあの女は確かに私の名をフルネームで言った。

「どーゆーこと？」

春が首をかしげた瞬間、何かがものすごいスピードで春の頭上へ落下してきた。

Game 8 (前書き)

感想書いてくれたらうれしいです！

なんせ初心者なんで何かいていいのやら……

Game 8

Game 8

「うそ……」

目の前には、さっきまでいた少女が2メートル立方の大きな黒い塊に変わった。

塊の下方を見下ろすと、赤黒い液体が大量に散っている。

玲菜は小刻みに震えだした。

「春……?」

ほとんど声にならなかった。

『それでは末次玲菜さんは、次のステージへとお進み下さい』

仮面女がそう言うと、スクリーンの横の壁がドアのように開いた。

「春……春は……?」

依然声はかすれている。

『神崎春さんは持ちコインが0枚ということで抹消いたしました』
にわかに信じがたかったが、実際目の前にさっきまでいた春の姿はなく、黒い物体の下敷きとなっている。

すると、玲菜はいきなり激しい嘔吐感に襲われ、その場でしゃがみこみ、嘔吐した。

春がつぶされた時の様子が鮮明にフラッシュバックする。ほんの一瞬だった。春が消えた。視界の突然の変化に脳がパニックになった。のもつかの間、今度は聞きなれない奇妙な音が耳から入ってきた。何か、それなりの硬さがあり、かつ柔らかいものが一気に潰れたような音。そう、丁度人くらいの硬さものだ。はたまた奇怪な音に脳は混乱する。次は鉄のような匂いが鼻をついた。思わず顔をしかめる。

一体、何が起きた。

考えようとした刹那、脳みそが勝手に全て物事を解釈した。
春が潰れた。

今度は目眩が起きて、その場に倒れこむ。動悸もする。

また、吐いた。

胃がねじ切れそうだ。

『早く次のステージへ進まないと、失格とみなします』
何が起きている。

これは夢か、現か。

そうか、私達はゲームをしていた。コインを拾うゲーム。

玲菜はゆっくりと立ち上がる。

丁度あの天井の穴からコインが一枚落ちてきたっけ。あの黒い物
体も。

口元を拭う。

はなからボーナスマゲームなんて、なかったんだ。どっちかひとり
が一枚しかコインを取れなかったんだ。

仮面女の方を向く。

春は、殺されたんだ。

女を睨む。

あの女に。

玲菜は発狂して、スクリーンに向かって駆け出した。

『時間切れです。末次玲菜さん、失格』

玲菜の頭上にも春同様、黒い塊が落ちてきた。

Game 8 (後書き)

今年で高校生になります。

高校になったらかけなくなるかも……

Game 9 (前書き)

感想をお願いします!!

Game 9

Game 9

田中絵里は急に足を止めた。

何で私こんなところにいるの？

急にこれまでの記憶が飛んだような気がする。

どうして？

立ち止まり、考える。しかし、どうしても思い出せない。

気づいたら、ここにいた。という感じだ。

じっと考えていると、あることに気づいた。

あれ？この携帯誰のかな？

私の右手には見たこともないキラキラとした携帯が握り締められていた。

ますます疑問は増す。

一体、どういうこと？

一応、携帯の中身を確認することにした。

おそろおそろ携帯を開くと、知らない女の子2人が、楽しそうに笑っているプリクラが写っていた。

誰だろう？

気になり、携帯のプロフィールを見て、確認する。少し躊躇いながら、携帯を操作する。幸い同じメーカーの携帯だったため、簡単に探し出せた。

【神崎春】

やっぱり知らない名前だ。

絵里はまた待ちつけ画面に戻した。

右側の女の子には、「はる」と書かれており、左側のおとなしそうな子には、「れいな」と書かれてあった。

まさか、私、泥棒した……？

絵里は急に不安になった。

無意識のうちにはやってしまった。ってよくあるパターンのやつじゃない。どうしよう。

絵里はあたふたし始めた。

こういう場合ってどうすればいいの？

焦りはどんどん募る。

そつだ、盗んだ記憶がないから、拾ったことにはしておこう。

絵里はあたりを見渡し、交番を捜した。

幸い、交番はすぐ目と鼻の先にあった。

でも、なかなか一歩が踏み出せない。

私、盗んでないよね？

しかし学校から帰る途中からここに来るまでの記憶がない。

自分を信じるか、疑うか。

「章弘……」

つい好きな人の名前を呟いてしまい、恥ずかしくなった。

聞こえてないよね？

というよりは周りにはあまり人はいない。

章弘、今日もデート忘れちゃってたなあ。

そつ落ち込んでいたら、

あれ？そついえば帰宅途中に、章弘にずっと電話してて、それがら……。

思い出せそうと思ったが思い出せなかった。

今度は自分の携帯を開いた。

章弘と自分との数少ないプリクラの一枚が待ち受けとして表示されていた。

章弘だったら、どうする？

「知るかよ。盗んでねえんなら早く交番に持っていったら？」

と、無愛想なことを言われるのを必至で、章弘に電話を駆けてみた。

やっぱり出ない。

章弘今頃何してるんだろう。

人の心配より、自分の心配をしなきゃ。

絵里は大きく深呼吸し、交番に向かって歩き出した。

そうだ！私は盗んでなんかいないんだ！

交番に入ろうとした瞬間、

やっぱり怖いよお。

と、引き返そうとした。

しかし遅かった。交番の中にいた制服警官と目が合った。すると

彼は絵里に微笑み、こちらに向かってきた。

きゃー。来ないでー。

と叫びたかったがそうはできず、とうとうつかまってしまった。

「どうした、お嬢ちゃん？」

「私何も盗んでませんから許してください」

絵里の目には涙が浮かんでいた。

Game 10 (前書き)

今回は長いですがどうか最後まで読んでください。
あと感想待ってます！！m()m()m

Game 10

Game 10

「まあ、たとえどつちかのコインがなくなってもゲームに負けるっただけだ！しぬとかありえねよ」

祐輔は無理やり笑顔を作った。俺にはそう見えた。

「と、とにかくだ。当たりと外れを見つけようぜ」

章弘も笑ってみせ、さつき座ったイスを調べ始めた。祐輔も同様に近くにあつたイスを入念に調べだす。

「なんもねえ。ただのイスだ」

章弘は違うイスを捜し始める。

「こつちもだ」

祐輔も違うイスに手を伸ばす。

「あつた！」

章弘が突然声を上げた。

「どうした？」

祐輔が問うと、章弘は、

「じゃーん」

と自慢げにイスの裏側を祐輔に見せた。そこには、大きく『アタリ』と書かれていた。

「これ、楽勝じゃん！」

そう言つて章弘はそのイスに腰掛けた。

「あつてめー！先に座りやがって、ずりいぞ」

祐輔が不平を言う。

「先に見つけたほうのものですっ」

しかし章弘は聞かず、足と腕を組んでのんきに鼻歌を歌いだした。

「ちつ仕方ねえな」

祐輔はそう呟いて、近くのイスに座った。

「またオレ様のコインが……」
祐輔がそう言った瞬間、彼の手元から5枚のコインがどこかへ跳んでいった。

祐輔は肩を落とす。一方章弘は上機嫌だ。

『それでは代ゲーム開始』

仮面男がそう言うと、2人はイスから立ち上がり、またイスを調べだす。

章弘はさきほど『アタリ』と示されていたイスの裏を見た。

「あれ？ やっぱり一回当たりだったイスからはヒントが消えてる。不思議なイスだなあ」

章弘が言うように、さっきのイスの浦には何も表示されていない。

「ま、どうにしる座れないんだけどね」

章弘は鼻で笑ってちがうイスを調べだす。

「こいつも違うか」

章弘はまた別のイスを調べる。

「おい、やけにしずかじゃん？」

章弘はにやりとして祐輔に言った。

「さっきのそんな悔しかった？」

祐輔をばかにする。

「ちげえよ。ちゃんと調べてるだけだよ」

祐輔は不機嫌になっていた。

章弘はまたもやにやりとして祐輔に言った。

「ねえ祐輔くん、これ、見て」

章弘は満面の笑みで祐輔にイスの裏を見せる。

「オマエまさかまた見つけたのか！」

祐輔が大声を出した。

「え？ なんも書いてないじゃん」

今度は疑問の声を投げかける。

「うっそーん。何もありません」

章弘はゲラゲラ笑い出す。対してだまされた祐輔は舌打ちをして、

またイスを調べだす。

「おこなよ。悪かった悪かった」

章弘は手を合わせて謝罪する。顔は笑っている。

「ささとみつけねえと5分たつぞ」

祐輔は冷たく言い放った。

「へいへい」

章弘もイスを調べだす。

「あつた〜ん」

章弘が上機嫌な声を出す。

「よし！あつたりー！」

章弘はそう言っつてイスに座った。

「おいおいマジかよ……」

祐輔は溜息をついて適当に近くにあつたイスに座った。

「次こそはオレが見つける」

祐輔はそういきごんだ。が、

「おい、祐輔。そこ、俺が最初座つたイス……」

章弘が今度は真面目に言う。

「は？うそだろ？」

祐輔は立ち上がる。

すると、仮面男がいきなりしゃべりだした。

『祐輔様、一度座つたイスにお座りになられましたね？よってル
ール違反とみなし、失格となります』

「は？やめるよ。またちがうイスに座るからさ」

祐輔は違うイスに座った。

『一度イスに座つた場合、変更は認められません』

仮面男は冷たい声でそう言った。

「そんなん聞いてねえぞ！」

祐輔が怒鳴った。

それを尻目に、仮面男は

『祐輔様、失格』

と言った。

「おいふざけんじゃねえぞ！」

祐輔が立ち上がるうとした瞬間、何か刺さるような音がした。

「祐輔、オマエ……」

章弘は目を丸くして祐輔を見つめる。いや、祐輔の、お腹を見つめた。

祐輔も自分のお腹を見た、そして、絶叫した。

祐輔の腹には、イスの背もたれから生えてきた長いとげに貫通されていた。

血が滲み出しているのが見えた。

「祐輔！祐輔！」

章弘はイスから立ち上がって祐輔のもとへかけよる。

祐輔は目を開けたまま死んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1773/>

イス取りゲーム

2011年10月7日02時50分発行